

## 中国人民大學

### 「資本主義國家の貨幣流通と信用」

武 藤 守 一

中日戦争の末期、日本軍占領地区においては国幣インフレ、連銀券インフレ、儲備券インフレに悩まされ、国民党軍地区においては法幣インフレに悩まされ、破局的状態にあった。他方、いくつかの中国共産党軍のいわゆる解放地区においては困難な条件の下にありながら健全な通貨金融政策が採られ、日本軍の敗退につれて地域は拡大し、また一層健全となった。通貨金融政策だけが孤立して存在し得るものではなく、その拡大発展は解放地区の軍事的政治的経済的拡大発展との関連において考えられねばならないことは当然のことながら、その通貨金融政策の適確かつ巧妙であったことも見逃すことはできなかった。

それと同時に、いな、それ以上に驚歎に値したのは、戦後における中国共産党の通貨金融政策の適確かつ巧妙なことであった。四五年八月、日本帝国主義の敗退、平和となって半年後の四六年春からの全地域にわたる激しい内戦、それを忽ちにして統一し、蔣政権を台湾に亡命させた中国共産党の軍事力ならびに政治力の偉大さはい

うまでもなく、四九年一〇月中華人民共和国成立当時においては極度に混乱し拾収の方法さえも無いかの如くであつた通貨金融制度を、比類のない短期間に、中国人民銀行を中核として整備安定させ、十周年を迎えた今日においては、ルーブルと並んで世界で最も安定した通貨となり、金融制度は飛躍的な五ヶ年計画の完遂を資金面から促進する重大な役割を果しつつある。

この内戦から建国以後今日までの適確かつ巧妙な通貨金融政策も、上述したのと同様に、それだけを孤立して考えることはできず、中国共産党の領導による中国の軍事的政治的経済的拡大発展との関連において考えられねばならないことは当然のことである。しかし、その通貨金融政策の適確かつ巧妙であつたことも大きく評価されねばならない。ところで、それが中国においてどうして可能であつたか。それはいうまでもなくマルクス主義通貨金融理論の優れた点、そのような理論を解釈するだけでなく、さらにそれが中国の具体的現実の適確な分析の上に適用されたからに外ならない。

この意味において、中国の通貨金融理論および通貨金融の発展と現状に深い関心をもつていた。戦後二回にわたる中国訪問、殊に二度目の中国訪問に際しては、主としてこの方面に注目して見聞して来た。各大学では多くの人々と懇談した。また大学で通貨金融に関する講義がどのような内容でなされているかを知りたいと努めた。中国人民大学を訪問し懇談した後で、同校の通貨金融の講義に用いられていたテキストを贈呈されたが、それがこの「資本主義国家の貨幣流通と信用」（一九四七年）である。

いうまでもなく、中国における大学の講義は、それぞれの教研室に属する人々が、共同討議してテキストをまとめ上げ、それに基いて誰かが講義することになっている。この「資本主義国家の貨幣流通と信用」も、それと

全く同様で、中国人民大学の貨幣流通信用教研室に属する周作仁、楊承祚、黃達、林与権その他の人々により、財政信用学科の学生が「貨幣流通と信用」という学科目を履習する参考書として編集されたものである（編者序言）。

中国の大学における中国人民大学の地位からして、各大学における「貨幣流通と信用」という学科目の講義内容は、大体において、この「資本主義国家の貨幣流通と信用」によって推測することができるという意味において興味深く読んだわけであり、その意味において簡単な紹介と批評をしようと考えた。

## 二

「資本主義国家の貨幣流通と信用」は中国人民大学出版社から出版され、本文は十一章三三四頁、二つの附録を加えると四二〇頁というかなりの分量になっている。内容もかなり多岐にわたっている。それを章別に示せば次の如くである。

第一章 貨幣の起源と本質および機能（一—四三頁）

第二章 貨幣制度（四四—六四頁）

第三章 貸付資本と信用（六五—一〇五頁）

第四章 擬制資本と証券取引所（一〇六—一二二頁）

第五章 銀行と銀行業務（一二三—一六六頁）

第六章 発行銀行と銀行券流通（一六七—一九四頁）

第七章 紙幣と通貨膨脹（一九五—二二五頁）

第八章 国際収支と国際信用（二二五—二五八頁）

第九章 貨幣信用恐慌（二五九—二七六頁）

第十章 資本主義の全般的危機の時期における資本主義国家の貨幣信用制度（二七七—三〇〇頁）

第十一章 資本主義の全般的危機の段階における貨幣信用制度の危機（三〇一—三三四頁）

附録一 ブルジョア貨幣理論と信用理論の批判（三三五—三七六頁）

附録二 現代主要資本主義国家の貨幣信用制度（三七七—四二〇頁）

以上のような本書の体系は、編著者の序言によれば、ソ連のアトラス、ブレクリ両教授の著書を参考にし、さらに自分たちの講義における体験によって決めたものとされており、殊にブレクリ教授の著書「資本主義国家の貨幣流通と信用」から大部分の材料を借用したとも書かれており、書名までそのままに用いられている。

本書編集の目的は、上述した如く、中国人民大学財政信用学科の学生が「貨幣流通と信用」について学習するための参考書として、「資本主義国家の貨幣流通と信用」を編集するように、中国人民大学貨幣流通信用教研室から指令されたからである。その内容は序言にある如く、「マルクス・レーニン主義政治経済学のうち、貨幣流通と信用に関する理論を闡明」することであり、特に「資本主義国家における貨幣信用体系の構成およびその各機関の機能と業務」および「資本主義の全般的危機における資本主義国家の貨幣信用体系の状況および、それが金融独占資本に利用されて独占利潤を獲得する経路」について詳述しようとするにある（編者序言）。

問題がかなり多岐にわたっているので、相当の頁数でありながら、個々の問題については極めて簡単に触れら

れているに過ぎない結果となっているが、止むを得ないこともある。また多少問題だと思われる点もあるけれども、社会主義社会における学生に資本主義国家における貨幣流通と信用の問題を学習させるテキストとしては、よくまとめられており、社会主義社会の大学における講義としての貨幣信用論に関心のある者にとっては興味深いものがある。

いうまでもないことであるが、あらゆる問題について階級的立場から、しかも常に具体的事実との関連において論述が進められていて明快である。高度な(?) 抽象的論理のもちあそばはどこにもなく、極めて現実的実践的である。上述したところの戦争中から戦後および統一建設期における、中国の通貨信用政策の偉大な成功は、いろいろの点を考慮しなければならぬとしても、この理論と実践との密接な関連性、抽象的論理と現実との結合、そのような理論を身につけた活動家が以前から多くいたからに外ならない。私は戦争当時、日本側通貨金融政策が実に無為無策であったこと、これに反して確実に侵透しつつあった解放地区の適確な通貨金融政策を思い出さざるを得ない。

そのような通貨信用に関する講義が現在の中国の大学でも行われているのであり、学生たちはこのような理論を身につけて躍進しつつある中国の経済建設に挺身しつつあるのである。ここで次のような話を思い出す。香港滞在中に聞いた大商社の支店長の話である。華潤公司(北京政府の貿易機関)の二階には、よほどの理論家である共産党員が派遣されて指導しているにちがいない。彼らの打つ手は実に鮮やかで驚歎に値すると。これも理論と実践とが実に鮮やかに結合されている例であると思った。余談はさておき、「資本主義国家の貨幣流通と信用」につき、多少具体的に述べることにする。

### 三

第一章の「貨幣の起源と本質および機能」は、第一節「交換の歴史的発展過程と貨幣の生成」、第二節「貨幣の本質とその物神崇拜性」、第三節「貨幣の機能」、第四節「貨幣の諸機能の歴史的発展」の四節に分れる。まず、貨幣の成立を、簡単な、偶然的な価値形態から貨幣形態への追求として、極めて困難な問題を簡明に叙述し、最後に、その結果として、「貨幣は一つの歴史的範疇」であること、「貨幣は自然発生の産物」であること、「貨幣は交換発展の必然的産物であり、社会的労働と私的労働の矛盾の発展の産物」であることを知らねばならないとしている（一四頁）。

かくして、第二節では貨幣の本質としては、「貨幣は一般的等価物として機能する商品であり、自然発生的に商品生産者の社会的労働を計算する要具である」（二五頁）と結論し、そのような結論を導き出すためには、貨幣の物神崇拜性を除去しなければならないとする（二六頁）。次いで、「貨幣は他人の労働を占有する手段となり、貨幣は転じて資本となる」ことを説明している。第三節では、貨幣の諸機能を簡単に説明し、最後に、「貨幣の諸機能は孤立したのではなく、それらは内在的関連をもち、それらはいずれも貨幣の統一的本質の体现であり、一般的等価物の機能の体现である」としている（四六頁）。

貨幣の諸機能については、さらに第四節において歴史的発展として追求し、特に現代資本主義という条件の下において發揮する貨幣の新しい機能の内容として次の如く述べている。すなわち「貨幣は現代資本主義の基本的経済法則の要求を実現する重要な用具である。……独占組織は最大限の利潤を保証し、一貫して国民経済の軍

国主義化の政策を行い、この政策を実現するために、通貨膨脹は不可欠の手段である。通貨膨脹の助けをかりて、吸血鬼は人民の財産を自己の財布に窃み取る。この外、帝国主義国家はまた広汎に貨幣を利用し、経済上から、その他の国家、特に後進国家を支配ならびに奴隷化する。現在、アメリカ帝国主義によって奴隷化された国家においては、アメリカ・ドルはすでに災難のシンボルとなっている」と(四三頁)。

以上の如く、第一章の「貨幣の起源と本質および機能」の説明は、極めて困難な問題を簡明に叙述してあると同時に、貨幣の諸機能の最後の部分で、現代資本主義における貨幣と独占資本の最大限利潤追求との関係、その一面としての帝国主義の後進諸国に対する収奪、殊にアメリカ・ドルの役割について触れているが如きは、理論と現実との結合という点で特徴的である。

第二章の「貨幣制度」は、第一節「貨幣制度の形成とその構成要素」、第二節「複本位制、複本位制から金単本位制への移行」、第三節「金単本位制とその資本主義発展における機能」、第四節「帝国主義と資本主義の全般的危機における貨幣制度」の四節に分れる。第一節から第三節までは、特に問題点はない。

第四節は、第一項「帝国主義グループと植民地従属国グループの貨幣制度」、第二項「幣制の宗定性を破壊する要素としての金本位の崩壊」、第三項「金塊本位と金為替本位」の三項に分れる。まず第一項では、帝国主義と資本主義の全般的危機においては、「貨幣制度は帝国主義グループと植民地従属国グループの貨幣制度に分けられる。少数の帝国主義強国はこれらの方法を採用して、自己の植民地従属国の貨幣制度に対する覇権を樹立し、植民地従属国の人民大衆を奴隷化し掠奪するのを便利にした」と述べている(五九頁)。その具体的方法としては、

(1) 「植民地従属国の通貨を、一定の比率で宗主国の通貨と固定した連系におき、前者を後者の附属物とし、同時

に、比率の確定は宗主国が植民地従属国に商品を販売し資本を輸出するのを有利」にするようにし、(2)「宗主国の銀行が植民地と従属国において価値符号の発行権を独占」することにあるとしている（七九、八〇頁）。

第二項では「帝国主義時代には、金本位の一切の基礎が弱体化した」と指摘し、第三項では金塊本位および金為替本位は「いずれも金本位弱体化の現われである」とし、一九二九年の世界経済恐慌以来あらゆる資本主義国家は紙幣流通制度に転向するに至ったが、しかも「紙幣流通の情況の下における、各国通貨の絶えざる価値低下と慢性的崩壊は、正に資本主義の全般的危機の日増しに深化していることを反映している」と結んでいる（六四頁）。

#### 四

第三章は、第一節「高利貸信用」、第二節「貸付資本」、第三節「利子と利子率」、第四節「資本主義信用の本質と形式」、第五節「貸付資本市場」、第六節「信用の資本主義経済における機能」の四節に分れる。第一節において、まず前資本主義社会における高利貸信用の役割を説明するとともに、最後に「現代資本主義の条件の下においても植民地と従属国においては、高利貸がなお非常に重要な地位を占めている」、しかもそれが帝国主義と密接な関係にあることを強調している。その密接な関係とは、「第一に、帝国主義・封建主義および土着資本家階級の収奪と圧迫により、農民経済は極端に貧困と落後に陥るのであるが、これが高利貸の発展に有利な条件を与える。第二に、帝国主義者は意識的に高利貸の活動を保留し強化し、それによってこれらの国家に対する支配と掠奪を強化する」と（九四頁）。その典型的な例はインドおよび旧中国であるとし、毛沢東主席の言葉である「帝国主義列強は中国の通商都市から辺鄙な農村に至るまで、買弁と商業高利貸の収奪網をつくってしまい、広



汎な中国農民とその他の人民大衆を収奪するのに都合よくした」(「毛沢東選集」第二卷、六二三頁)を引用している。  
第二、三、四、五節については特別のこともないが、第六節の「信用の資本主義経済における機能」において、信用が現代資本主義の基本的経済法則に奉仕し、それが「独占資本家が最大限の利潤を獲得する手段」となっていることを強調する(一〇四頁)。それとともに、「信用制度の二重性」を強調し、「信用は資本主義の発展を促進する要素であり、……他面において、信用はまた社会主義への移行の物質的前提条件を準備する要素の一つである」とする(一〇二頁)。

最後に、信用は国内において独占資本が最大限利潤を追求する手段となるだけではなく、対外的にも、「信用は帝国主義国家の侵略と拡張政策において重要な作用」をもつことを強調し、その例として戦後のアメリカの「マーシャル・プラン」をあげている(一〇五頁)。このように貸付資本と信用の問題を論ずるに際しても、国内的には独占資本との階級的関係において、対外的には帝国主義国と植民地従属国との関係において、問題を常に現実的具体的に取扱っている。

第四章は、第二節「擬制資本」、第二節「株式会社」、第三節「証券取引所と取引所業務」の三節に分れる。第一節で「有価証券の相場は決してその名義上の価値で決まらずに、有価証券の収入の資本化によって決まる。それは有価証券のもたらす収入に正比例し、利率に反比例する」と述べているのは正しいが、それを算式で示せばこのようである。有価証券の相場 =  $\frac{\text{有価証券の配当あるいは利子収入}}{\text{貸付利率}}$  と同じであるが、これは 有価証券の相場 =  $\frac{\text{有価証券の名義価値} \times \text{有価証券の配当あるいは利子収入}}{\text{貸付利率}}$  と訂正すべきであると思う(一〇八頁)。

擬制資本は帝国主義時代には大量的に膨脹するといひ、それは「株券および債券を発行する株式企業の広汎な

発展」にもよるが、「他の重要な一原因は、国債の大量増加であり、この国債の増加は、帝国主義戦争により、また国民経済の軍事化による」としている（一一二頁）。しかも「有価証券発行量の増大は、全然生産に参加せず、専ら利札切によって生活する寄生階級の大いに増大したことを意味し」、このことは「資本主義の寄生性と腐朽性の極端な強化の表現である」と述べている（一一一、一一二頁）。

第二節では株式会社が資本主義発展に果たした役割を評価するとともに、「株式会社の発展は、同時にまた生産の社会性と私的資本主義的占有形態との間の矛盾を尖鋭化」させたという事実を指摘することを忘れていない（一一三頁）。また、株式会社は資本の「民主化」を実現したというブルジョア理論家に対しては徹底的に反対し、「これは完全に資本主義の収奪を隠蔽し偽瞞することを企図するタワ言である」とし、その実体を曝露している（一一三頁）。

第三節では、証券取引所が資本主義の発展に積極的役割を果たしたことを認めながらも、それは「有価証券投機を中心」であり、「大資本家が有価証券の小所有者を掠奪する道具である」ことをも指摘している（一一七、一一八頁）。また、取引所投機が経済恐慌を尖鋭化させる作用をも指摘している。

なお、帝国主義の段階においては、擬制資本の大量的増加によって証券取引所の取引額は増大するけれども、国民経済におけるその役割は却って衰退せざるを得ないという。その理由として、「帝国主義時代には、銀行の集積および独占により、銀行独占資本と工業独占資本との結合の成長および、それによって生じた銀行証券業務と創業活動の発展により、有価証券取引の大部分が少数の大銀行の手に集中させられる」からであるとす（一九一頁）。結局、帝国主義の時代においては、大銀行が証券取引所そのものをも支配するに至るのである（一二〇頁）。

## 五

まだ、全体の半分も紹介しないうちに頁数を費し過ぎた。しかし、以上の紹介でも知られるように、不十分だと思われる点、あるいは問題だと思われる点がないわけではないが、全体として要領よくまとめられていて興味深い。なお、本書はマルクス主義の立場であるから当然のこととはいえ、どのような問題についても、常に現実との関連において、殊にあらゆる貨幣信用問題を国内的には階級的な立場から、現代資本主義においては独占資本の収奪という観点に集中され、対外的には帝国主義の植民地従属国に対する収奪という観点に集中する如く問題が展開されている。その意味において理論が極めて階級的に現実的であり、実践的である。第五章以下も同様の論法で叙述が進められている。中国の大学において、貨幣信用に関する講義が、このような内容で行われていることに深い関心をもつのである。